

(国語科)

『書くこと』で読みを広げ深める指導のあり方(第4年次)

―「思考力」を育む国語科の学習をめざして―

大阪市立森之宮小学校 研究部

1 はじめに

平成24年度から国語科授業において「書くこと」を核として、児童が自分の思いや考えを広げたり深めたりできるような指導のあり方を探ってきた。児童は書くことが好きで「もっと書きたい」「書くことが楽しい」と国語の授業のみならず、日常的に文章を書くことに取組んでいる。研究4年目の今年度は、児童の思いや考えをより質の高いものにするために、国語科だけでなく他教科や学校生活、強いては社会生活の全てで活用される「生きてはたらく力」(思考力)を育成するための実践研究に取り組むことにした。

2 研究の内容

「思考力」を育成していくためには、「読む」「書く」「話合う」といった多様な言語活動に取組み、活動を通して継続的に行う必要がある。特に、「書くこと」は学習効果から見ても、「思考力」の育成に密接に関連していると言える。今年度、「思考力」に視点を当て、「思考力」育成の観点から教材文を分析・構造化し、その教材文を通してどのような「思考力」を育成していくのか、そのために、どのような言語活動を構成していけばよいのかを明らかにするために、実践研究を進めていった。

3 研究の視点

国語科の学習において「順序」「比較」「類別」「理由づけ」「推理」「定義づけ」の6つの「論理的に関係づける力」即ち、「思考力」の育成が可能になると考えた。そのため、次の7つの視点を設定し、授業研究を進めていくことにした。

- (1) 課題解決型学習の設定 (2) 教材文の分析と構造化 (3) 「読むこと」の活性化
- (4) 「書くこと」の活性化 (5) 「話合うこと」の活性化
- (6) ノート指導と板書計画の工夫 (7) 「表現の場」の活性化

4 実践の手法

- (1) 課題解決型学習の設定 … 自らが設定した課題を追究・解決する授業
 - ㊦ 課題把握の場(児童自らが意識したり設定したりできるように支援)
 - ㊦ 課題追究・解決の場(自分の思いや考えを分かりやすく伝えたり、相手の話を積極的に聞いたりできる「交流の場」のあり方を工夫)
 - ㊦ 自己実現の場(学習活動を通して身に付けた「思考力」を活用しながら、考えた思いを文章化して表現し、伝え合う)
- (2) 教材文の分析と構造化 … 次の3点を考慮し行った教材文分析を基にした授業
 - ㊦ 全体の分析(人物や場面の設定、物語の展開や結末、話題提起や論の展開、要旨をとらえること)
 - ㊦ 部分ごとの分析(人物の心情や考え方の変容や場面の移り変わり、段落の役割や展開の工夫をとらえること)
 - ㊦ 細部の分析(優れた表現技能や効果的な言葉の使われ方などをとらえること)
- (3) 「読むこと」の活性化 … それぞれの「場」で、音読を効果的に採り入れた授業

「書く」だけでは、「思考力」を効果的に育成することは難しい。「読む」「話す・聞く」といった多様な言語活動と関連させることで、より効果的に「思考力」を育むことができる。そこで、自分の思いや考えを確かなものにしたり豊かなものにしたりするため、音読を効果的に採り入れ、その活性化を図っていった。

(4) 「書くこと」の活性化

… どこを「視写」するのかを検討して行うことで、読みの理解が深まる授業「視写」で教師と児童とが一体となり、文章を読み深めていくことができる。「書くこと」で、曖昧だった自分の考えが明確になる。自分の考えが文章として、書かれてあれば、友だちの考えとも比較したり関連付けたりすることもできる。また、考えの変容も明確に意識することができる。そのことによって、児童の「思考力」も育まれていく。学級の全ての児童がスラスラと「視写」する文章を書けるようになり、授業そのものも引き締まっていった。

(5) 「話合うこと」の活性化 … 「書くこと」を基盤とした交流のあり方

これまでの実践を見直し、話合い活動を通して「思考力」を駆使・活用できるよう工夫することを考えた。交流前に、書くことで課題に対する自分の考えを明確にし、友だちとの話合いを通して自分の考えと友だちの考えを比較したり、関連付けたりしながら、よりよい考えに広げ・深めていくことをめざした。そうすることで、自分の考えを練り上げていくことができると考えた。

(6) ノート指導と板書計画の工夫

… 「思考力」が活用されるような構造化された板書やノート児童は教科書の文章を視写するのではなく、教師が黒板に視写している文章を視写する。自分たちの設定した課題が、どのような「思考力」を駆使・活用しながら、どのような過程で解決されていったのかが明確に示された板書・ノートをめざした。

(7) 「表現の場」の活性化

… 身に付けた「思考力」をより確かなものとするために行う「表現活動」の必要性「思考力」を活用しながら表現することで、学習活動に達成感や成就感をもつこともできる。生きてはたらく力を身に付けることができたかは、新聞や台本等の作品や発表・交流の様子から確認する。そこから、どのような根拠に基づいているのか、どのような思考力を駆使しているのかを評価することができる。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

視写や書き足し・書き込みを学習活動の中に効果的に取り入れたことで、「比較」「理由づけ」「推理」「定義づけ」などの思考を駆使したり、表現の細部にまで目を向けて文章を読んだり、また、心情だけでなく、場面描写などに目を向けたりすることができた。その結果、場面の様子や人物の心情や行動について深く考えたり、作者の表現の工夫などについて深く考えたりすることができた。

(2) 今後の課題

正確に丁寧に取り組む「視写」には時間がかかるため、話合い活動や学習のまとめ、振り返りの時間を確保することが難しかった。今後は、全児童の筆速を高め、「読む」「書く」「話す・聞く」といった言語活動をバランスよく展開し、テンポやリズムのよい展開の中、学習活動ができるよう研究・研鑽を進めていきたい。